



# 「ドボクまち歩き」 楽しく歩いて、きちんと学ぶ

授業という枠を飛び出して趣味や課外活動から土木の新たな魅力に迫る「休日ドボク」。第3回は実践編「ドボクまち歩き」と題し、まちの歩き方と実践例を紹介する。現在の姿から歴史を感じ、土木の物語を探しに行こう。

## 土木の視点でまちを見る

思い返してみてもほしい。みなさんは  
まちの中に「土木」を感じて歩いたこ



写真1 当時の面影を残す旧十思小学校(現十思スクエア)

とはあるだろうか。普段何気なく歩く道路をはじめ、まちは「土木」でできている。今回お勧めする「ドボクまち歩き」は土木的視点を持ち、まちを歩くことで現在の姿から過去を振り返り、新たな土木の魅力を発見しようという試みである。

さて、いざまち歩きをしようとする際、どのようにプランを組めばよいのだろうか。今回はそのノウハウを、まちづくりを専門とし、土木遺産めぐりの講師も務める日本大学理工学部まちづくり工学科准教授の阿部貴弘先生に伺った。

**無理なく、自由に、楽しんで**

まち歩きプランのポイントを教えてください、という質問に「まち歩きプランを組むのも、必ず見たい数個

所を決めるだけの自由度の高いコース設定にするといいですね。」と教えてくれた阿部先生。実際に行って、見ている途中にテーマから逸れるスポットを組み込むとお話し。と語る阿部先生。まち歩きで最も大事なことは、「まち」を楽しむことなのだ。それを基本に以下三つのノウハウを伝授していただいた。

1. 誰と一緒に行くのか？  
一緒に歩く人により歩くペースや安全面を考慮する必要がある。
2. どこへ行くのか？  
どんなまち歩きをしたいのかを考える。小地域の歴史を追うのか。プロジェクトに注目するのか。見たい施設から選ぶのか。
3. どのくらい歩くのか？

季節や体力を考慮すると、約2時間、3〜4kmの範囲で収めるのがちょうどよい。

この範囲でルートも決めよう。

ポイントは、「そのプランの見所を決めること」これは中心を定めることで範囲を絞りやすくする目的がある。さらに歴史に注目してまち歩きをする場合は特に、古地図も利用して新しい道と古い道を意識して見学場所までの道そのものも楽しむこともオススメと教わった。ぜひ覚えておきたい。さて、このノウハウを受け、私たち学生委員もプランを練り、まち歩きを行ってみたい。次ページでは、その実践例をご紹介します。

**帝都復興事業を見に行こう**

阿部先生のノウハウに従い、仲間た

[アドバイザー]

**阿部 貴弘 氏**

日本大学 理工学部 まちづくり工学科 准教授

**ABE Takahiro**

1973年東京都生まれ。1996年東京大学工学部土木工学科卒、1999年同大学院工学系研究科社会基盤工学専攻修士課程修了。博士(工学)。技術士。パンフィックコンサルタンツ(株)、国土交通省国土技術政策総合研究所を経て、2012年4月より現職。





写真2 歩道に描かれていた江戸のまち並みのスタイル。

園があるとのこと。そこま  
川の対岸、近くに清澄庭  
絶景スポットになっていた。  
東京スカイツリーが望める  
は華奢に見えた姿も、見上  
美しい橋である。遠くから  
げると重厚感ある橋の上は  
絶景スポットになっていた。  
川の対岸、近くに清澄庭

した先人たちを訪ねてみては  
える想いがある。皆さんも国  
の想いそのもの。まちを歩く  
に触れる機会となった。まち  
の歴史そのものであり当時  
「取材・執筆」  
朝倉 萌子 学生編集委員

ちと関東大震災の帝都復興事業をテーマに昭和通りを中心とし、復興小学校、復興公園を回り隅田川橋梁群の清洲橋をゴールとしたプランを練った。いよいよまち歩き実行である。  
春を感じさせる3月某日、学生委員4人で日本橋駅からスタート。昭和通りを北上する。昭和通りは建設当時その交通量の少なさにキャッチボールをする子どもの姿がよく見られた、というエピソードを持つ。それが約90年後の現在、往來の激しい道路となった。まさに「100年後を見越した」土木計画である。さて、その昭和通りを眺めつつ到着した旧十思小学校、現在は十思スクエアとその名を変え公共施設となっている場所である。復興小学校とは復興公園とともに実用性と防災性

も兼ね帝都復興事業で大きく予算を割いて取り組まれた事業だが、当時の姿を残すものは少なく、ここは気軽に見学できる数少ない場所である。施設入口にはかつてこの地域一帯が伝馬町牢屋敷だったことを伝える模型が設置されている。安政の大獄で吉田松陰らもここで最後を遂げたそうだ。隣接する復興小公園の十思公園には石碑が置かれているほか、江戸時代から時を告げていた「情の鐘」と呼ばれた鐘楼が鎮座する。帝都復興事業の跡には江戸の面影も見つけることができた。

### 今なお変わらぬ憩いの地

で足を伸ばすことにした。  
緑豊かで広々とした清澄庭園は三菱財閥の創始者、岩崎弥太郎が所有していた土地を、震災後に岩崎家当主が有事の際の避難場所として当時の東京市に寄付し、後に一般公開されたものだという。昔も今も地域住民の憩いの場として親しまれている。復興公園に名を連ねなくともこれもまた帝都復興事業の一つの姿だろう。

### まちを歩く魅力とは

だろうか。

「まち」に土木を見ることで今までとは違った土木に気づく機会となる「ドボクまち歩き」。8月号はその第二弾として構造物を見る際のポイントと大阪を舞台にまち歩きを紹介する。



図1 帝都復興事業まち歩きMAP